

近畿中部防衛局主催 第35回防衛セミナー
「国防を支える力 ～防衛省・自衛隊の隊員を知ろう～」

日時：平成31年2月4日（月）

場所：関西大学梅田キャンパス KANDA I Me R I S E

講演：

○基調講演 「わたしから見た防衛省・自衛隊」

NHK名古屋放送局長 島田敏男氏

○講演 「自衛隊員の日常」大阪地方協力本部（陸）倉角1等陸曹

（海）深澤1等海曹

（空）福田2等空曹

近畿中部防衛局 管理部 施設管理課 前田早穂

○パネルディスカッション

（司会）NHK名古屋放送局長 島田敏男氏

大阪地方協力本部（陸）倉角1等陸曹

（海）深澤1等海曹

（空）福田2等空曹

近畿中部防衛局 管理部 施設管理課 前田早穂

※聞き取りのまま

【局長挨拶】

皆さんこんばんは。私、近畿中部防衛局長の島と申します。本日の防衛セミナーの開催に先立ちまして、本セミナーの主催者側である防衛省の代表として、ご挨拶を申し上げます。

本日は皆様、大変ご多忙中のところ、わざわざ足をお運びいただきましてありがとうございます。また、本日は多くの学生様にも来ていただいていると聞いております。本日の講義が終わった後、いろいろなお誘いがあった中、断ち切って来ていただいた学生様にも本当にご苦労様でございます。

さて、皆様もここ数年に及ぶ新聞報道やテレビ報道によって、いろいろ肌で感じていらっしゃる方もいらっしゃると思いますが、わが国を取り巻く安全保障環境というのが、非常に厳しいものになっております。何が厳しいかといいますと、簡単に申しますと、皆さん既にご存じの北朝鮮の問題でありますとか、中国それからロシアといった国の問題が、わが国に非常に差し迫ってきていると。特に北朝鮮においては、度重なる核実験、それから弾道ミサイルの発射、それからその弾道ミサイルに核を積むための小型化・核弾頭化、そういった技術も刻々と進められているという風に聞いておるわけでございます。

また、一方中国におきましても、ここ30年間で公表ベースにおきます予算だけでも、50倍を超える予算を付けてきていて、急速な軍の近代化を図ってきていると。また習近平さんにおかれては、21世紀中葉までには中国を世界一流の軍隊にするといった目標をもっていろいろと進んでいると。

また、一方ロシアにおきましても、北方領土を含む我が国周辺の核開発を中心とした

近代化、一般兵器の近代化も図ってきていると。こういった情勢の中に我々の日本国があるわけでございます。

こういった情勢に対応するためにも、防衛省・自衛隊といたしましては、日米同盟の強化や諸外国との安全保障協力態勢の構築など各種施策を進めているわけですが、また、いざという時のために、対処するために、自衛隊としましても平素からの備えや各種事態に備えるための訓練、それから演習、そういったものを全力で取り組んでいるものであります。

そこで、今回の防衛セミナーは、そのような自衛隊員の日常について、そこで勤務する自衛隊員の日常について、知っていただきたいとの思いから開催するものでございます。本日の基調講演としましては、NHK名古屋放送局長の島田敏男先生にお願いしております。局長からは「私から見た防衛省・自衛隊」と題しましてお話をいただきます。その後の講演では、陸・海・空の自衛官、それから事務官。事務官と言いましたけれど、防衛省にいるのは、皆さん自衛官と思っている方がいらっしゃるかもしれませんが、一般の国家公務員の試験を受けて勤務している防衛省の事務官もおりまして、そういった自衛官・事務官を含めまして自衛隊員となっております。

そういった自衛隊員の日常の顔と言いますか、日常の生活も含めまして、「自衛隊員の日常」と題しましてお話をいただきます。その後、島田局長を司会として、陸海空の自衛官と事務官とのパネル・ディスカッションを行います。日夜勤務に精励する一人一人の自衛隊員が、日々どのような思いを持ちながら任務にあたっているのか、本日のセミナーを通して分かっていたいただければ、私としましても幸いです。

最後に、本日のセミナーを開催するにあたりまして、多くの関係者の皆様のご支援とご協力をいただきました。この場をお借りしまして、厚くお礼申し上げます。本日は最後までどうぞよろしく申し上げます。

基調講演

「私から見た防衛省・自衛隊」

【司 会】

それでは基調講演を始めさせていただきます。

基調講演は、NHK名古屋放送局の島田敏男(しまだ としお) 局長から、ご講演いただきます。島田局長は、山梨県甲府市のご出身で、中央大学法学部政治学科を卒業後、NHKに入局され、福島放送局、青森放送局の記者を経て、報道局政治部記者、首相官邸キャップ、政治部デスクを歴任されました。平成13年からは解説委員、解説主幹、解説副委員長として、「日米同盟強化の行方」など数々の解説をされました。この間平成18年から、平成30年までの足かけ12年にわたりNHK総合テレビ、ラジオ第一放送で「日曜討論」の司会を合計395回務められました。平成30年からは名古屋放送局長として、人々の命と暮らしを守り、地域の課題や魅力を積極的に発信されておられます。

本日は、「わたしから見た防衛省・自衛隊」と題しまして、お話をさせていただきます。それでは、島田局長、よろしくお願いたします。

【島田敏男氏】

皆さん、こんばんは。広い会場に大勢の方、おいでいただいております。

先程、政府を代表して島局長がご挨拶をなさいましたので、公式見解は局長が全て喋っていただいた。何で私がここに来ているかと言いますと、私はNHKの記者として昭和の時代から仕事をしてる中で、防衛省・自衛隊の歴史の変遷というものにずっとお付き合いしてきた。時には防衛省・自衛隊に対して厳しくかみついたこともあるし、国民の皆様新しい活動について分かっていたくためのいろんなりポートをしたり、やっていくうちに解説委員で17年間も、防衛省・自衛隊を中心とする政治の動き、こちらの方に足を踏み入れて、長年お付き合いをしてきました。

ですから、言ってみれば、当事者である防衛省・自衛隊の皆さんと国民の皆さんとの間の、言ってみれば接着剤という風な役割を少しは果たしてこれたのかなと、そんな気持ちがあるものですから、実は去年の5月27日まで解説委員の仕事で、画面で喋っていました。画面で喋る時にはちゃんと髪も黒々として、そしてメーキャップもしっかりし、もう少し若く見えるんですけどね。今はそういう風なメーキャップなどの予算も何も付いておりませんので、素のままこちらにまいりました。

名古屋のNHKの局長というものは行政職ですので、自分で画面に出て喋ることはない。NHKの中で、私は名古屋ですから東海北陸なんですよ。関ヶ原の向こう、あちらのエリアの今責任者ということで、こちらは大阪放送局長がいらっしゃって、先日、仁義を切っておきました。「あなたの領地に私が講演にまいりますので、どうぞお許し下さいませ」という風に言って仁義を切ってこちらに来ております。

防衛省・自衛隊、今日こうしてみますと、お若い方から、長年の防衛省・自衛隊の国民との間のいろんな右へ行ったり左へ行ったりしながらの歴史をよくご存じの方で、様々いらっしゃるようで、その辺年齢層にも大きな幅があると。お立場的にもいろんな方がいらっしゃるんじゃないかということも念頭に置きつつ、ちょっと私なりの私見をお話させていただきます。その意味で、今日は何と言っても自衛官と事務官の中堅若手の諸君がですね、この後プレゼンテーションをやるんでね、是非それを聴いてあげて下さい。

その上で、それじゃ足りないよと私が思ったところを、残り1時間程かけて、この壇上でネチネチといろいろ質問しますので。日曜討論というのを私も12年やって、人に質問することだけは得意になりました。本当は幹部自衛官で陸将とか海将補とかそういう人たちを相手にネチネチとやるところを、今日はそういう方達ではなくて、将来の幹部になるであろう人たちに優しく質問すると、そんな演出を考えております。そこで防衛省・自衛隊の話、そうですね、私から見た防衛省・自衛隊、一言で申し上げますと、「よくもここまで成長したもんだな」というのが僕の考えです。1989年、あの冷戦崩壊の前、私は1981年からNHK記者を地方でやってたんですけどね、その当時から自衛隊の方とはいろんな所でお付き合いをしてきましたけれども、1980年代の防衛省、当時は防衛庁・自衛隊というのは正に東西の冷戦の対決の最後、言ってみれば古い時代の遺物であるかのような見られ方をしていた時期がありました。

日本は西側陣営で、アメリカの代理人として極東の守りに自衛隊を捧げているんだみたいな、それを誇りに思う人と攻撃する人の両方がいました。

しかし、冷戦が崩壊した後、世の中はそんな単純なものではなくなってきました。世界中に危険な場所がいっぱい出てきて、それを国際社会の協力の中で、できるだけ平和で安定して、その国に住む人たちが安心して過ごせる、そのためにPKO活動といったものが一気に脚光を浴びるようになって、日本もそこに自衛隊を出したわけです。大紛争の法律の議論をやって、1990年代にそれまでの自衛隊と違って、ただ単にいつ来るかも分からない戦のための備えではなくて、実際問題、直接国民の暮らしを守る、そしてまたその力を海外の困っている国の民衆のためにも尽くすと、こういうことが新しい自衛隊のスタイルになったわけですね。勿論それをいいますと、元々自衛隊・自衛官というのは軍人であり武士の世界であるというようなことを語る方も大勢いらっしゃる。それも分かってはいる。しかし、今の憲法の下で、自衛隊に与えられた権能といいますのは、やはり平和を保つために、かつての各国の軍隊、日本の旧軍隊がやったのとは違うことをどうやって見せて、そしてそれに国民の信頼を得ていくかという、この非常に地道な努力、こういう世界に移ったことは間違いないですね

私はそういう風に、1990年代以降の国際社会の非常に難しい局面の中で、いざという時に役に立つ能力を蓄えている自衛隊というものの活動領域が広がって、そのためにいろんなことも訓練の中に取り入れたりしながら苦勞している。その苦勞こそが、国民に対して、自衛隊ってというのはいざとなった時に助けになる存在だなという気持ちを少しずつ醸成していったと思います。

その具体的な例が阪神大震災、そして東日本大震災、こういった大きな災害があった時の災害派遣という形で、国民の身近な所でその能力を発揮する。勿論、本当は敵国からの侵略に対して国を守るために迎え撃つと、こういう実力集団の法律制度が根っこにあるわけですが、そういう危険なことをやりおおせる能力の訓練というのは、要するに危険の存在の察知、そしてそれを避けるための術といったものが絶対必要なんです。ただ単に、ミサイルの命中精度が高いということだけではないんです。魚雷がうまく撃てて、ちゃんと当たるとか、そういう問題ではないんです。

危険というものの存在を分かって、そしてそれを回避して避けるという、こういう極めてプロフェッショナルな技術、その集積こそが、いざという万が一の国の安全を脅かす時と同時に、大災害時の国民の支援・救援ということにも役立つ。このことを国民皆が理解するようになってきましたので、それで自衛隊の存在というものに対する理解・認知度というのは、20年間の間に大いに向上した。災害派遣という、そういうプロセスの時の頑張りが、多くの国民に理解をされるようになったことが、非常に私は不幸中の幸いだと思って見ております。

そういう風な歴史を積み重ねてくる中で、今はどうなんだろうというのを見ていきたいと思いますが、当面、元々私は政治解説が商売で、未だに局長になってもそのトレーニングだけは怠らないようにしています。

今の政治の安定ということが、自衛隊をこれから先もよりよいものにしていくための礎であるわけですが、ご覧のように、当面の政治の動きというのはこんな風になっていますね。去年が2018年、今年が2019年、去年あった大きな出来事というのが自民党総裁任期が3年間の任期を2期努めた安倍自民党総裁が石破さんを破って3選と、引き続き総理大臣を務める資格を得たということであり、安倍さんは2021年の

9月まで自民党総裁としての資格を、そしてまた衆議院議員の任期満了となる2021年の10月、ですから政治的には今の国会の議席構成からいきますと、自民党が公明党と一緒に安定した基盤を持っているので、それをベースにして国の安全安心を図っていくと、これが基本となっています。

今度、参議院議員選挙が夏にありますね。あそこにも書いてあります。2019年の夏の参議院選挙、天皇の御退位と皇太子様の即位の終わったあとの参議院選挙、ここで今の与党が大負けすることがなければ、政治的には大きな動揺はそう走らずに、消費税率の10パーセントに引き上げというなかなかきつい政治課題も前に向かって進めていけるのではないかという風に思います。

来年、その先ですね、2020年東京オリンピック・パラリンピックこういうものがある、まさに1964年のあの東京オリンピックの時も自衛隊は大活躍しました。マラソンの円谷さんを始め、多くの選手を出して、それによって人材を抱えて育てる自衛隊という、そういう風な組織としての特性を十分に活かしたという時代が過ぎました。今度の東京オリンピック・パラリンピックに向けても自衛官の中から優秀な選手が生まれてくるという風に私も期待をしておりますけれども、何はともあれ、このような政治的な状況、これは国内の政治日程だけをまとめたものですが、これに外交が絡んできますね。

外交と言えば、最近では北方領土の問題をめぐる日露の交渉というのがありまして、まあだいたい、プーチンさんと安倍さん、仲良く二人だけで話し合いをしているわけですが、一体何処まで本気で北方領土の返還をやるかと考えているのか、まだまだ疑問が残ります。何回も何回も会談しても結果が出てこないの、そろそろいらいらする人が元島民の人の中から出てきておりますので、あんまり長く、この任期を全うするまでの間、日露首脳会談ばかり繰り返していると、ちょっと底が透けて見えてしまうということになり兼ねませんから、あまり問題の先送りということで、日露北方領土の返還交渉というものをなでさするだけでは済まないんじゃないかという風に感じる今日この頃です。恐らくこの2019年夏の参議院選挙の前に、この日露の外交交渉、これに対する臨み方、そしてまた6月にプーチンさんが日本に来ますので、その日露首脳会談で今度また結論が出ないということになると、外交というものは、安倍さんは首脳会談とか首脳外交が得意なので、これを支えに、これまでも長期政権を築いてきた面もありますが、この政治日程にガタガタと変化を与える危険性があるかも知れない。政治的にはそんなことがいろいろと考えられるのですが、防衛省・自衛隊ということに関して言えば、この前の民主党政権が出来た時だって、防衛省・自衛隊は健全な姿のまま、そのまま組織の力を保っていました。

政権を担当することになれば、自民党を下野させて、自分たちが政権を取ったあの民主党政権の時も、私も間近で付き合っていましたけれども、防衛省・自衛隊というものの存在を疎かにするようなことでは国民がついてきてくれない。これは鳩山さんも、菅さんも、野田さんも、特に野田さんはそうでしたけど、政権担当者になれば分かる。日本の安全というのが政治の原点だと、そういう意味で防衛省・自衛隊というものを本来の国民のために役立つ姿で維持・継続・発展させていくのが政治の最終的な使命という風に私は考えます。

ただ一方で、防衛省・自衛隊というのは安全保障という言葉の代名詞ですね。一方に国の役割としては社会保障という、また別の世界があります。国家にとっては、安全保障と社会保障というのは車の両輪のようなもので、両方バランスが取れてなければいけない。

今の国会を見てますと、皆さん、このところの報道で社会保障を担う厚生労働省、こちらの方にいろいろと統計問題で、今つまずきの石が転がっています。過去、政治の流れを見てると防衛省・自衛隊が国会論戦の焦点になってしまう安全保障が波風の年と、それから社会保障問題、これが波風の原因となる時と結構交互に來ます。

で、意外と安倍総理大臣という人は、厚生労働省関係のネタに弱いですね。1回目にお腹が痛くなって辞めた時も、結局あれは年金の問題でした。今回も今の安倍政権の足下が大丈夫かと心配する人、自民党にも大勢いますけれど、それは厚生労働省の問題だからであります。防衛省・自衛隊の問題ですと、安倍さんの足下というのはあんまり揺らぐことはない。そういう風な今の総理大臣と防衛省・自衛隊の関係、安倍さんも最高指揮官ですから、無理なことは言いません。むしろ、難しい任務を次から次へ出して、それに備えて訓練を重ねることを地道にやってくれという風な考え方ですね。あまり乱暴な命令を出したりはしない。そこのところは、そんなことをやったら国民から直ぐ見放されるということが分かっているからですね。これは是非、日本の為政者に常識として、今後も引き継いでいってもらいたいと思います。自衛隊に無理なことをさせて、乱暴な振る舞いをするようなことになりますと国民がそっぽを向く。

ちょっと外国の話になりますけど、それに類するものは最近の韓国の軍隊の動きですね、日本の自衛隊に対してレーダー照射、このレーダー照射といっても普通のレーダーではなくて、射撃用のレーダー照射というのを自衛隊の哨戒機に対して、韓国海軍の船がやってしまった。これは、国際法上は攻撃の一步手前の行動ですので、韓国側がいくら日本側がでっち上げてるとか何かと言っていますけど、あの音が補足されたというのは、軍事常識の上では、一定のレーダー照射というものが向けられていたのは間違いない。

何で韓国の軍隊がそんなことをやるのか。それは今の文在寅大統領が日本に対して厳しく出ることで政治的な得点を稼ごうとしている。それが北朝鮮の問題でも、南北融和ということに向かっていっている。むしろ南北朝鮮揃って、日本に対して厳しい態度を取った方が国民の支持が得られると、彼は彼なりにそう踏んでやっているということなわけですね。そういったものが日本の政治・外交を結構揺さぶってきますけれども、あの韓国のレーダー照射については、私の親しい韓国の安全保障の専門家、この人は政府の中枢に食い込んでいる学者ですけど、「これは暫く時間が経ったところで『ごめんなさい』と言わないと世界中から笑われるだろう」というくらい、ちょっとやり過ぎた。

中国も昔、尖閣諸島の近くで、海上自衛隊の護衛艦に対してレーダー照射をしたこともあったんですけども、この時は気づくのが早くて、直ぐにその辺については謝っていますね。

日本政府も、そして、その政府の一部を担う防衛省・自衛隊も毅然として「問題は問題」、「おかしいことはおかしい」として言い続けていくべきです。ただし、それ以上に感情的な世論を巻き起こすようなことはしてはいけません。それをやり過ぎると、これ

また国民の支持を失うということは目に見えていると思います。

客観的にデータの提示、そこに止めて、後は外交の世界で処理すると。日本が大人の対応をしないと今の韓国の政権は逆に自分たちの方が正しいという話にすり替えていきますんでね。ここは気を付けるべきだと思います。

さあ、あんまり私が長く話してもしょうがないんで、次のページ。やっぱりこれだけは忘れないで下さい。今言った朝鮮半島の問題でも、米朝首脳会談が昨年ありましたが、あの結論は何だったのか。一言で言えば、トランプ大統領はアメリカに届かないミサイルだったら開発しても良いから、アメリカを撃つことを辞めてくれたら、北朝鮮に対して、これまでとは違う態度をとる。言ってみれば、北朝鮮の核開発を事実上、容認したに等しい。これはけしからん話なんです。けしからん話だけれども、日米同盟という枠の中で国の安全を守っているんで、まあ安倍さんも外務大臣の河野さんも面と向かってトランプさんに「もういい加減にして下さい」とも言えない。

それはそうですわね。米朝首脳会談で朝鮮半島の争い事が、朝鮮半島での戦争、朝鮮戦争ですね、これが終結するという事になれば、世界史に残るわけですから、むやみに米朝首脳同士の話し合いを批判・否定するわけにもいかない。

しかし、ここを見て下さい。日本に向かってはこのようにノドン、スカッドと射程の短い弾道ミサイル、小型化した核弾頭も載せようと思えば載せる水準に来ているとも言われています。これが軍事筋の中で、だいたい何発ぐらいが日本に向けられているんだという分析の研究が様々出るんですが、まあ少ない人でも200発、ちょっと多めの人で600発。そんな単位のもので、日本列島に向けられている。これ現実としてあります。学者が言っているだけではなくて、私の取材によると、防衛省・自衛隊の中でも朝鮮半島の無線傍受ということをやってみて、そこから得られる北朝鮮の軍隊の日々の動きというものを観察していると、そこから変化が見えるんですよ。そういうものを、自衛隊の皆さんは地道に地道に積み上げて、そして勿論、情報として自分たちの判断の材料にしている。そういう風なせめぎ合いからですね、この同心円状のやっかいなミサイルの存在というのは、疑うことのできない現実ということが分かってきています。

アメリカ大陸に届かない大陸間弾道ミサイル以外であれば黙認すると言っているのと等しいのが今のトランプさんですが、トランプ政権がいつまで続くか分かりません。トランプが大統領の座から去った時には、次のアメリカ大統領は同じことはやらないと思います。今のINF条約の全廃、米露の間でまた溝を作りましたけども、やはりベクトルの方向が間違っているとしか言いようがないと思います。

日本の自衛隊は危機の拡大ではなくて、危機の圧縮、減少ということにこそ協力すべき存在だと。これは私、長年防衛省・自衛隊の皆さんとお付き合いして、私が言うだけでなく、そう信じてる方も幹部の中にも山ほどいらっしゃる。そういう中で専門能力を活かすということですね。それが求められている姿だと思います。

さあ、しかし、北朝鮮から来るもの、日本にやってきたら、皆さんもよくお耳にするでありましょう、イージス艦の上にSM3という迎撃用のミサイル、敵国を攻めるためのミサイルではない。北朝鮮から日本に向かって飛んでくる弾道ミサイルを早めに撃ち落とすための装備です。陸上ではPAC3という移動型の迎撃のミサイル、このシステムで抑止力、相手に攻撃を思い留まらせる、そういう風な力を養うということで、ここ

十年程来ているわけですが、そこにもう一つ、ここにありますイージスアショアという、これは陸の上に、陸上にイージス艦と同じような能力を持ったものを配備するというこ
とで、秋田県と山口県に今、建設が進められようとしている。これはあくまでも防衛用、
防衛型ですね。また、これで全部北朝鮮から飛んでくるものを撃ち落とせるというわけ
ではないですけど、まあ撃つても全て有効にはならないよと、こちらはそれなりに押
さえをしますよという意思表示をするというのが軍事上はやむを得ない、必要なことと
考えて良いのではないかと思います。

こういうものを維持するだけで相当ですね、日常的には労力がかかる、その地道な作
業を防衛省・自衛隊がやっている。万が一に備えて、他にはやった所はありませんから
ね、自衛隊だけなんです。そのための積み重ねというのが、私は国民にとって大事な財
産だと思ってます。

ここから先は専守防衛、防御型ということからちょっと外に出るかも知れないという
検討が、まだ研究の段階ですね。従いまして護衛艦「いずも」というのは、これはヘリ
コプター搭載型の護衛艦、外国ではこれは「空母」の一種だという風に言うんですけど
も、日本では現在「ヘリコプター搭載型護衛艦」と言っ、近距離に行動するヘリコプ
ターを載せる船。これをですね、朝鮮半島、それから南西海域、これは中国との関係、
それも考えると、もう少しいろんなことができたなら良いんじゃないかということでF3
5という戦闘機、その垂直離着陸の可能な機種をここに降ろしたり載せたりするこ
とができる、そういう装備に組み替えようという検討、それが今進んでいます。

更にその先、上にありますような射程距離の長い長距離巡航ミサイル、これは朝鮮半
島に撃ち込むということではなくて、敵基地攻撃という意味でそれに期待する議論があ
るのは承知してますが、それよりもやはり中国の海洋進出、そこに向かって抑止力を保
つために日本も射程の長い道具を持っていた方が、この方が予め危機を回避する上で押
さえになると、そういう風な判断というのが次第次第に強くなっていくという現実があ
ります。

しかし、これをやり過ぎますと、日本が攻め入ろうとしているという悪宣伝に利用さ
れますから、是非是非、是非是非、防衛省・自衛隊の皆さんには慎重に扱って、限定的
に利用するという、そういう考え方を、是非、今後とも徹底していただければと思いま
す。

しかし、このように国の安全を守るというようなことになると、今はかつてのよう
に、旧ソビエトの大戦車軍団が北海道へ上陸して日本を侵略するというような、ああい
う風な20世紀前半の考え方とは全く違う、現代の機械戦、こういった装備さえも無力
化するサイバーの攻撃というものが、コンピュータとデジタルの世界を媒介にして、軍
事的な内容というものをどんどん、どんどん色を変えて入っているという現実もありま
す。ですから、高いお金を使って長距離巡航ミサイルを手に入れたとしても、サイバー
攻撃を受けて大元の所でコントロールが効かなくなるということになれば、元も子もな
いという面もありますので、そういったものだけではなくて、通信、そして情報、そう
いった分野の自衛隊の能力向上ということも欠かせない。今そういう時代に入っていま
す。

ですから、防衛大学校を卒業したり、一般大学を卒業して自衛隊に入ってくる若手は

ですね、益々高度化した技術者としての能力、それが一方で求められている。しかし技術者だけでは組織として行動できませんから、それを支えるための様々な職種の人達が、チームとなって国を守ると、それが今の、これからの自衛隊のあるべき姿だと思います。

私が喋っていると、そこにいる4人の皆さんの持ち時間が減ってしまいますので、もうぼつぼつこのくらいにしますが、防衛省・自衛隊、歴史と共に変化しますが、国際政治がどのように動くか、ということによって求められるものが変わってくる。それは先程もお話ししたとおりです。それと同時に、防衛省・自衛隊が国民から信頼されるためには、政治も安定しつつ、しかしどういう風な政権に仮に変わったとしても、同じように防衛省・自衛隊といったものを支えるという国民の意志、それが明確でないと、やはりこの国の本当の安全というものは得られないと思います。ですから、21世紀に入ってから、いろんなことを経験していつてますね。海外への派遣、例のサマーワへの特別措置法による自衛隊の派遣、PKOよりもっと難しい。そしてまた、大災害、東日本大震災のようなとてつもない規模の災害派遣、こういうものも経験してきた。

そして、さっき見ましたような東アジアの状況、一つ間違えば中国も再び反日攻勢というものをかけてきかねない、そういう存在として意識しておいた方が良い。こういう風なことをですね、常に背中に背負いながら、現場の自衛官達は複雑な任務、そしてまた、自分たちが憲法の下で、法律の下で可能な範囲でぎりぎりのところを常に意識しながら、やり過ぎたら国民から怒られると、この意識を大事に皆さん研鑽を積んでいるのは私はよく間近で見えています。

皆さんも機会があればですね、そういったものを自衛隊の施設見学などで日々の訓練の様子なども含めてご覧になってはいかがでしょうかと思います。

その辺の自衛隊の日常については、これから4人の皆さんにお話ししていただこうと思います。私が後で、この会場にお集まりの皆さんから、事前に様々な質問をいただいておりますので、その質問を4人の皆さんに私が後でぶつけて、そして現職自衛官の言葉というのをお伝えしようと思っております。

長くなりました。30分、31分喋ってしまいました。申し訳ございませんでした。

じゃあ、皆さんこれからよろしくお願ひします。

【司会】

ありがとうございました。

講演 「自衛隊員の日常」

1 倉角 1 等陸曹

初めまして、倉角と申します。それでは始めさせていただきたいと思います。

まず自己紹介なんですけれども、名前の方は倉角綾と申します。階級の方は、1 等陸曹をいただいております。出身は、偶然にも島田局長と同じ山梨県出身です。関西には結婚を機に移り住んでまいりました。家族なんですけど、同じ陸上自衛官の夫と高校2年の息子、中学1年の娘の4人家族です。

職種の方は通信科で、専門は無線通信ということで、モールス信号等を主にやっております。現職務においては、自衛隊大阪地方協力本部守口出張所の方で広報官をやらせていただいております。

経歴はこちらの方になります。平成8年、朝霞駐屯地にあります婦人自衛官教育隊の方に一般2士、今でいう自衛官候補生として入隊しました。自衛隊を知ったきっかけなんですけれども、当時、東京都内の大学生だったんですけれども、横浜の方に遊びに行った時に、横浜駅で葉書を貰ったのが自衛隊を知るきっかけとなりました。阪神大震災の後だったんですけれども、自衛隊がどういう活動をして、何をしている人達なのかは殆ど知らずにいました。なので、その葉書を見て、自衛官が公務員だということを知って、それだったら安心かなと思った軽い気持ちで受検したんですけれども、そんな中でも合格しました。何で訳も分からないというか、知らない自衛隊に入ったかという、当時、結局一度もあつたことはないんですけれども、広報官の方から入隊するかどうかの返事をする期限ぎりぎりの時に「約40倍の競争率を勝ち抜いたんだよ」と言われたその一言で私は即決しました。こんなに倍率のある仕事って何なんだろう、何をしている人達なんだろう、本当に好奇心いっぱい直ぐにその電話で「入ります」と言いました。折角なので自分の目で見て、経験してみようかなと、若かったのかと思いますけど決めました。なので、両親の方にも事後報告ということになってしまったので、両親は不安や心配が沢山あつたんじゃないかなと、今では思っています。

職場なんですけれども、陸上自衛隊は16個の職種に大きく分かれるんですけれども、その中で私は比較的女性の数が多い通信科の方に配属となりました。そのため上司や先輩にも沢山女性がいたので、普段から相談とか愚痴とかを聞いてもらえる環境があつて、本当にそれは男社会と言われる自衛隊にあつて、恵まれていたんじゃないかなと思います。ここまで続けられてきたのも、そういう女性隊員の先輩のお陰かなとも思っております。

通信科でも、山や演習場で活動する部隊と基地、駐屯地等に居て通信をとる部隊とがあるんですけど、私は野外部隊の方に配置となりました。写真にあるようなこんなトラックを山や演習場に持って行って、そこでアンテナを立てて通信をとるといったことが私の任務でした。この写真なんですけれども、今一番新しい器材で、ボタン一つでアンテナが立ちます。ただ私がやっていた頃は、自分で杭を打ってアンテナを立てるということをしてました。

今こんな形で大体無線班というのは、1個班3人から4人で山に入って訓練するんですけれども、女性も多くいたので班全員女性ということもありましたし、私が班長となつて男性隊員を連れて訓練に行くということも当時からやりました。特に私が男女の差

があるというか、ハンデがあるなというのは大きく感じたことはなかったです。一生懸命やっではいるんですけども、できなくても絶対無理だなということも特に私は感じはなかったです。

今の広報官という職務に就くまでは、通信科なんですけれども情報に携わる仕事をさせていただいております。約1000人位いる部隊だったんですけども、たった1人しか就くことができない役職を与えていただきました。この役職は情報に携わるということで、特に何かあった時ですね、本当に如何に正確に早く指揮官に情報を提供できるかということが大変重要だったんですけども、特に何かあるというか、無いのが一番理想なんですけれども、在職中、地震や豪雨などの災害、またサミットなどの国家行事などの支援もあって、本当にいろいろな経験をさせていただきました。

で、この役職を通じて本当に貴重な経験というか、普通に無線通信をやっていたらできないような経験をさせていただいて、大変、失敗とかも沢山あったんですけども、学ぶべきことは本当に沢山あって、同じ役職に7年間も就けていただいたのは、指揮官や上司の方には本当に感謝の気持ちで一杯です。

自衛官になって良かったなということではですね、この写真、武装走という競技なんですけれども、勿論こんな競技は自衛官じゃなかったらしないと思うんですけども、こういった競技も経験できたりだとか、こういう独特な競技以外にも球技大会や持続走大会というものが開かれます。それを通じて体力の維持向上や若さを保つ秘訣なのかなと勝手に思っています。

いろいろな経験ができて、またそこから夢や世界が広がるというのが、自衛隊の大きな良かったことかなと私は思うんですけども。特に私の新隊員の同期ではですね、陸曹航空学生というのを受験して、ヘリのパイロットになった同期がいます。この彼というのは、ちょっと経歴が変わっていて、普通に一緒に一般隊員として入ったんですけども、元々体力がある隊員で、射撃がよく教育中から当たっていたので、教育終了後、体育学校の方に近代五種の強化選手としてスカウトされていきました。世界大会とかにも出て、オリンピックを目指してたんですけども、数年やってオリンピック選手になるよりヘリパイになろうという新しい夢ができて、体育学校からまた部隊に戻り、試験を受けて、合格して、今はヘリのパイロットとして活躍しています。同じく新隊員の同期で、彼の操縦するヘリから空挺団にいった同期が降下するとか、彼の操縦するヘリから映像を撮るという後期教育中からは想像もつかなかったような共演というか、今現実にあって、そういう話を聞いているだけで私自信の世界も広がるような気がするので、就職してから、こんなにいろんな世界を知るとか、経験ができるというのは本当になかなか無いなと思っています。なので、今後自衛隊を去る時にですね、電話で即決した判断は間違いではなかったなと思えるように今後も取り組んでいきたいなと思います。以上で終わります。

講演 「自衛隊員の日常」

2 深澤 1 等海曹

皆さんこんばんは。自衛隊大阪地方協力本部中央地区隊で阿倍野ハルカスの近くにあります阿倍野出張所で広報官をしております海上自衛官の深澤です。本日は貴重な機会とお時間をいただきますので、私のこれまでの自衛隊生活を振り返って、海上自衛隊の勤務について紹介させていただきたいと思っております。

始めにスクリーンの左側に映していますのが、昨年秋頃から、不本意な形で話題になってしまいました海上自衛隊の象徴であります自衛艦旗です。右側ですが、表のような物を映していますが、スマートで、目先が利いて几帳面、負けじ魂、これぞ船乗り。この言葉はですね、海を主な職場とする海上自衛官はですね、何か突発的な事象が起きてもですね、バタバタせずに、スマートに対応して、状況をよく見て、一歩先を考え、戸惑うことなく、取扱いを丁寧にして、そして自然の猛威には絶対負けない強い意志を持ちなさいと、海上自衛官の心構えを端的に表した言葉です。

先程も紹介していただきましたが、自己紹介をさせていただきます。本当に偶然なんですけど、島田様と倉角様と同じ山梨県出身です。私の出身は甲府市なんですけど、島田様とは目と鼻の先ということが先程分かりまして、ちょっとびっくりしていました。現在はですね、大阪府堺市の方で自宅を構えまして、家族4人とペット2匹と一緒に暮らしています。現在、大阪地方協力本部の広報官ということで、採用とか広報の仕事を丸3年程やらせていただいておりますが、専門の仕事は船の機関のガスタービンということで、エンジンの運転とか整備をメインにやっております。

私、今から21年前、平成10年に高校卒業と同時に自衛隊に入隊いたしました。高校3年の時に進路を考えていたんですけど、将来の目的とか目標とか何も見つからずにはですね、周りの人が次々に進学を決めていく中でですね、様々な経験が出来そうということで、その理由だけで自衛隊入隊という道を選びました。

正直、当時高校3年生なんで、高い国防意識とか防衛問題に興味があったというわけではなく、広報官の方に自衛隊に入ったら何でもできるよ、いろんなことができるよと言われてまして、人と違ったこんな道も良いかなと、それくらいの気持ちで自衛隊に入隊しました。

山梨県をご存じの方もおられると思っておりますけど、周りを山で囲まれて完全に海無し県です。海上自衛隊に入るのは変わり者とよく言われるんですけども、私のもう亡くなっているんですけど父方の祖父が旧海軍の船乗りで、母方の祖父も航空部隊で飛行機に乗るという関係に育ってきていて、まさか自分の孫がこんな道に入るとは思ってもみなかったと思っております。私、これまで神奈川県横須賀と、京都府舞鶴、そして大阪と3つの任地で勤務してきましたけど、もう少しそれを紹介したいと思います。

平成10年の春に神奈川県横須賀教育隊に入隊いたしました。新しい生活に意気揚々と溶け込もうと思ったんですけど、初めて実家を出て、初めての寮生活、場所も環境もがらっと変わって、初日から挫けそうになりました。自衛官の基礎となる教育隊というところでは、知識を得るために座学で勉強したり、隊力作り、海上自衛隊の教育隊では必ずプールで泳がせられますので、体力作りとあと実習、この三本柱で普通の人を自衛官に育て上げてくれます。隊力に自信がなかった私は、常にどん尻争いをしてお

りまして、同期の方々に引っ張り、起こされたり、何とか修了させていただきました。この時助けてくれた同期なんですけど、今40位になって立派なおじさんなんですけど、今でも連絡を取り合っていて、親友になっていますね。今の皆の一斉目標は、4年後に迫った入隊25周年記念の同窓会を何処でやろうかと考えているところです。

教育隊を修了した後、船の部隊、飛行機の部隊、それぞれ専門の仕事毎にバラバラに各地に巣立っていきます。私も船のエンジンの勉強のために術科学校という自衛隊の学校に通って、エンジンの基礎を学ばせていただきました。当時は本当に覚えることが必死で、考える余裕も無かったんですけど、普通科の高校を出て、機械系のことを全然学んでいない私を、何十億もする船のエンジンを扱わしてくれるような機関科員に育て上げてくれる自衛隊の教育システムって素晴らしいなど、やっと今になって思えるようになりました。その後、現場の部隊実習を挟んで、もう1回教育隊でもうちょっと勉強してですね、本格的に船乗り人生がスタートしました。

艦艇勤務を始めた時に丁度舞鶴の方に転勤になりまして、暫く6年程、護衛艦の機関科員ということで、護衛艦に乗っていたんですけど、6年後の2006年に海外を巡る遠洋航海に参加するチャンスをいただきまして、「どうするか」と言われたんですけど「はい、是非行きます」と即答しました。

これがその時のコースなんですけど、遠洋練習航海というのはですね、防衛大学校出身の方と一般大学からキャリア採用ということで採用された方に船のイロハを教えながら、国際親善を兼ねて、海外を半年程かけて回るコースです。

私が行ったのは主に北アメリカ、北米大陸を巡る北米コースで、4月に出て9月に日本に帰ってきました。その間、6カ国で11寄港地、アメリカ大陸、アメリカ合衆国が多いんですけど、こんなコースで行きました。一番遠いところでパナマ運河を越えて、大西洋のボストンまで行ってまいりました。

こちらに遠洋練習航海中の風景で、左上が東京晴海埠頭を春出港したところですね。そして各地を巡って、右下、防火服、消防服を着ているんですけど、船を守る訓練とかもします。大体、1週間訓練をして、週末にどこかの国の港に入るというのを繰り返して、半年間巡って行きます。

自衛隊は勤務レベルに応じて適宜教育を受けるというシステムを取っています。私も遠洋練習航海の後に、エンジン関係のオペレーションとかトラブル処理の勉強のために、もう1度、学校に入校しました。私の来歴の中で、学校とか教育隊とか6回程教育を受けています。その他に2週間程度の講習とか、そういうものに数々参加しております。数が多くなるので割愛させていただきました。

初めての仕事に就く時には、それまでに、それに対する教育を受けるというのが自衛隊のシステムになっています。2回目の学校が終わった後ですね、先程、島田様の講演の中にもありました弾道ミサイル防衛なんですけど、弾道ミサイル防衛構想の整備の時期真っ最中にイージス艦勤務になりまして、イージス艦への弾道ミサイルSM3搭載工事に立ち会わせてもらいまして、その後ハワイの方に弾道ミサイルの装備認定試験というのがあるんですけど、それに参加させてもらうという非常に貴重な経験をさせていただきました。

私もイージス艦にずっと長く乗っておりまして、2012年、リムパック2012に

参加させて貰いました。リムパック、環太平洋合同演習というんですけども、太平洋の沿岸諸国の国と同盟国が、2年に1回ハワイに集まります。私が参加した時は22カ国から2万5千人の船乗りが、一斉にハワイの方に終結しました。これスクリーンに映させて貰っているのが海外の訓練の様子なんですけども、左側が各国の船全部が一斉に走っている艦隊行動、右側はアメリカの補給艦から日本の護衛艦が給油、燃料を貰っている様子を映しています。この辺りは防衛省ホームページとか報道とか、世界の艦船というJシップの船系の雑誌とかですが、ご覧になった方もおられるかと思います。

こちらが海外の一つの様子なんですけど、船乗りにはネイビーファミリーという言葉がございます。所属とか人種が違っても、国を守るということに関しては同じ仕事をしている仲間みたいなものだというそういう文化なんですけども、各国の船乗りが集まるとこういうスポーツの大会とか、バーベキューとか、結構集まって一緒にワイワイやろうという、多く行われます。

ご存じの方、何人かおられと思いますが、ちょっと前なんですけど、バトルシップという映画がやっていましたが、その映画もリムパック2012をモデルにしたんですけども、冒頭のシーンで日米対抗のサーカアの試合が行われたんですけど、正にこんな感じで実際行われています。ちょっと話、余談になるんですけど、この映画で日本のイージス艦みょうこうが出てたんですけど、艦長をやられているのは浅野忠信さん、個性派の格好良い艦長を演じられていました。実際の艦長は全く逆で、見た目はいつもにこにこ仏様のような顔で、それはそれは皆なから信頼されている方です。

下の方ですね、若干写真載せさせてもらったんですけども、リムパックが終わって1ヶ月くらいハワイで停泊しています。停泊の時、勤務の修了した夕方からですとか、休みの日とかですね、普通に観光とかロケ地とかに行くことができます。左側は日立の木で有名なモアナルアガーデン、右はワイキキビーチですね。モアラモアナ行く人とかダイヤモンドヘッドに登る人とかですね、海上自衛官、結構ハワイとか行きますんで、地図無しで一人でオアフ島ぐらいなら1周できる海上自衛官は結構ごろごろいます。

その後、イージス艦勤務満喫していたんですけど、6年間位船に乗っていましたが、そろそろデスクワークもしてみなさいということで、15年間船乗り続けていたんですけど、一休みさせてもらって、舞鶴の方で2年間ですね、船の整備計画を担当すると部署2年間やった後に、3年程前、この大阪地方協力本部で広報官で勤務させて貰っております。

駆け足で、早口で申し訳なかったですけど、これまでの略歴の方を語らせてもらいましたけども、いろいろと自分で振り返って見ましてもですね、本日このような講演をさせてもらうことも含めまして、貴重な経験をさせてもらったなと思います。まさか海なし県出身のやつがですね、船に乗るとは誰も思ってなかったですね。

最後になりましたけれど、大阪ですと海上自衛隊と言いますとね、ちょっと接する機会が少ないので、あまり知らない方が結構おられますんで、拙い話で申し訳なかったんですけど、これを機会に少しでも興味を持っていただけたら幸いです。

本日は、ありがとうございました。

講演 「自衛隊員の日常」

3 福田 2等空曹

皆さん、こんばんは。ご紹介にあずかりました2等空曹の福田と申します。私、このような多くの方々の前でお話しさせていただくことが初めてでございますので、お聞き苦しい点もあるかと思いますが、ご了承下さいませ。

まずですね、改めまして、私福田と申します。年齢は35歳です。家族構成としましては、妻が1人、普通妻は1人ですね、子供が2人います。出身なんですけども、私山梨ではなく、兵庫県の出身となります。

今ですね、私このような濃紺の航空自衛隊の制服を着させていただいておるんですけども、最初は陸上自衛隊に入隊しました。自衛隊に入ったきっかけなんですけども、私は高卒、直ぐ自衛隊に入隊しております。高校3年生の時に、進路を考える時に、ちょっとすこぶる勉強が苦手でありまして、これ以上、大学とか専門学校で勉強するのは「嫌だな」というところで、就職という選択肢をとったんですけども、就職を考えてた時にですね、どのような仕事がしたいかと漠然と考えた時に、ちょっと小さい頃から人の役に立つ仕事がしたいなという気持ちがございました。その中で公務員という、安定もしている自衛隊を選んだわけなんですけど、私ですね、最初陸上自衛隊に入ったんですけど、元々自衛隊は陸海空があると思うんですが、航空機とか格好良いなという思いがあって、航空自衛隊が良いかなと思ってたんですけど、私の出身兵庫県とかここ大阪におきまして、航空自衛隊の基地が無いんですね。ですから、身近な存在ではなかったというところで、本当に航空自衛隊がどんな場所で、どんな勤務をしているかさっぱり分からなかったところで、家の近くに陸上自衛隊の駐屯地がありましたので、知り合いでも自衛官の方いまして、よく話しを聞いてですね、家族とも相談して、近くだし陸上にしたらという感じで、最初陸上自衛隊に入隊しました。

陸上自衛隊ですけど、最初、大阪の和泉市にあります信太山駐屯地というところに入隊しまして、最初新隊員の課程を受けて、職種としては小銃手、普通科隊員の小銃手、本当皆さんが一般的に想像されている陸上自衛隊の隊員みたいな感じの仕事をしておりました。

こちら任期制の隊員で入隊しまして、陸上自衛隊の場合は2年、4年、6年の区切りで退職金を貰って次に、辞めるという選択肢もできるんですけど、いざですね、自衛隊、私も元々隊力に全然自信がなくて、入る前は心配していたんですけども、いざ入ってみると段階的に訓練とかやってくれまして、凄く恐ろしい場所だと思っていたんですけど、そこまで、教官も優しくて何とかやっていけました。陸上自衛隊は、一生陸上自衛隊で続けていこうとは思ったんですけど、陸上自衛隊に入って3年ぐらい経った時に、ヘリコプターに乗って、空中機動というんですが、ヘリボーン訓練というのをやらせてもらった時にですね、航空機に乗り込みまして、その時にやっぱり航空機は格好良いなという気持ちが芽生えてきてまして、4年目の区切りの時に一回だけ航空自衛隊の試験にチャレンジしてみようと思ひまして、これに落ちたら陸上自衛隊で一生続けようかなと思ってたんですけど、運良くですね、試験はマークシートですので、航空自衛隊の試験に合格しまして、平成18年から心新たに航空自衛隊に入隊して、今に至っているという感じです。

航空自衛隊、最初ですね、大体愛知県より西寄りの方はですね、山口県にあります防府南基地、こちらで新規隊員の訓練を約3ヶ月間受けます。その後、私職種が輸送員という職種になりました。航空自衛隊はですね、約60種類位の沢山の職種がございます。その中の輸送員という職種になりました。輸送員という職種になったら今度、福岡県にあります芦屋基地、こちらで輸送員の最初の勉強をする機会がございます。この輸送員課程をどういうことをやるかと申しますと、大型トラックの免許を取得したり、後は航空自衛隊の輸送に関する勉強、例えばですね、勿論航空自衛隊ですので空輸、航空輸送ですね、航空輸送の勉強であるとか、車両輸送の勉強であるとか、後は意外ですが鉄道輸送とかそういったこともやっておったりします。

その勉強を終えまして、初任地は愛知県にあります高蔵寺分屯基地という所に配置になりました。高蔵寺分屯基地というのはですね、補給処と呼ばれる部隊でありまして、業者から一回高蔵寺分屯基地に物が納入されます。納入された物を全国の必要とされ基地に配分するというのが仕事となります。ですから大量の貨物を扱う仕事になりますので、輸送員としては結構やり甲斐のある基地なのかなと今振り返れば思います。

まず高蔵寺分屯基地に着隊しまして、一応輸送係と書いてあるんですけど、更に細かく分けると車両係という仕事をさせて貰いました。車両係というのは、実際ドライバーとしてトラックやバスを運用して、人や物を運ぶという仕事であります。その後ですね、この高蔵寺分屯基地に9年半程居たんですけど、最初ドライバー、色々勉強させて貰った後、次に空輸係という係をやらせて貰いました。ちょっと写真用意してます。このようにこちらC130輸送機になるんですけども、こちらに物を積んだり降ろしたりするような仕事をやっておりました。また積んだり降ろしたりするだけではなくて、航空機の中も広いので、何処に、どの場所にどれくらいの物を載せるかという計算をやったりですね、荷物、今ネットのようなもので縛着されているかと思うんですけど、こういった荷物を準備したりですね、この左上にあります車、カーゴローダーという車なんですけども、ローラーが付いてまして簡単に物を動かすことができます。このカーゴローダーに荷物を載せまして、飛行機の後ろにドンとつけます。荷物を降ろしたり積んだり容易にできるという優れものがございます。

こういった仕事をさせていただいて、次に平成28年、白山分屯基地、三重県の津市にあります凄い山奥の部隊です。こちらはペトリオットの部隊になります。そこで1年間単身赴任で、家族と離れて寂しい生活をさせていただきました。この部隊ではペトリオットの機動展開、ペトリオットは車、大きなトラックみたいになってまして、必要な箇所に展開させるという仕事、その輸送に関する手続きとか調整という仕事をさせてもらっておりました。

で今、広報官として、JR茨木駅前にございます茨木地域事務所で広報の仕事をさせてもらっております。結構自衛隊って、皆さん、この二方もそうなんですけど、いろんな仕事をさせてもらえる場所なのかなと私実感しております。

ですから最初自衛隊に入ることにはですね、体力面でも学力の面でもすごく不安だったんですけども、すごく教育体制が整っております。ですので本当に向上心さえあれば新しい仕事にどんどんチャレンジすることができるので、入って良かったなと思います。今広報官という仕事をさせてもらっておりますけど、ここですね、勿論私は元々航

空自衛隊というものをよく分かってなかったというのがありますので、是非頑張って、この大阪の地で航空自衛隊というものを少しでもPRできれば良いかなと思っております。後ほかに言いますと、大阪地方協力本部というところは陸海空の自衛官が勤務しております。海上自衛隊のことや陸上自衛隊のことを勉強させてもらってですね、今後また部隊に行った時ですね、陸海空の統合輸送というのを今凄く行っておりますので、そういったところで生かしていけたら良いかなと思っております。

ご静聴ありがとうございました。

講演 「自衛隊員の日常」

4 前田事務官

皆さんこんばんは。ご紹介いただきました近畿中部防衛局施設管理課で行政財産管理第2係というところで係員をしております、前田早穂と申します。本日は皆様ご多忙の折、お越しいただきましてありがとうございます。

私、近畿中部防衛局なんですけれども、2015年度に採用されまして、今年度で入省4年目ということになります。先程ご紹介いただきましたとおり、経歴が大変短いんですけども、今までスピーチいただきました御三方の中でも、私が一番ペーパーでございまして。大阪といいますか、関西の者は、初心者といいますか、若輩者をペーパーと言います。緊張しまして、本日寝違ひまして首が回りません。ですのでこんな感じなんですけれどもお付き合いいただければと思います。よろしく願いいたします。

本日なんですけれども「自衛隊員の日常」ということで、テーマにお時間をいただきました。自衛隊と言えば陸海空の自衛官の方々のイメージが強い方もいらっしゃると思うんですけども、実は沢山の事務官、私のような事務官も働いておえます。防衛省の事務官は普段どういった仕事をしているのか、本日は是非皆様に知っていただきたくってお話させていただきますので、どうぞよろしくお願い致します。

まず、わたしが在籍しております近畿中部防衛局というところですね、どういう組織かということについて、少しだけお話させていただきます。

近畿中部防衛局というところなんですけれども、所属する職員の大半が自衛官の方々、要するに制服を着ていらっしゃる方々以外の職員が大半の組織になります。こちらの組織なんですけども、自衛隊、自衛官の方々が常にスムーズに活動できるように、そしてもしもの時に効果的に機能するようにするためにサポートすることが私達の仕事になります。

こちらをご覧くださいまして、トップに局長がいらっしゃいます。総務部、企画部、調達部、管理部、各地方に小松防衛事務所、京都防衛事務所、舞鶴防衛事務所という風にございまして、東海地方にも東海防衛支局というところで名古屋に支局もございまして。こういった組織なんですけれども、総務部では主に文書の管理や人事などを行う総務課、局の収入支出を管理する会計課、他にも工事の契約を行う契約課がございまして。こちらは他の企業様の総務部とほぼお仕事は一緒かなという部分もあるのですけれども、そういった仕事をしております。

その右側、企画部になるんですけれども、企画部には地方調整課と防音対策課、周辺環境整備課というところがございまして。地方調整課では自衛隊と駐屯地、あと基地のある地域の住民の方々達との関係作りをメインに仕事をしております。防音対策課と周辺環境整備課というところなんですけれども、こちらは自衛隊の活動によって地域住民の方々に負担をいただいている部分がございますので、そういった負担を軽減するための事業に対して補助金を支出しているところになります。

その右側ですね、調達部なんですけれども、調達計画課、建築課、土木課、設備課、事業監理課というところがございまして、駐屯地や基地の建物、こちらは実は自前で建てております。それぞれの分野において、それぞれのプロがいらっしゃいますので、そ

のような方達が工事に携わっていらっしやいます。

その右側、管理部というところなんですけれども、こちらが私が所属している部署になります。管理部では業務課、施設管理課、施設取得補償課の3つの課があるんですけれども、業務課では米軍属による事故の補償、施設管理課では国が所有する不動産の管理、施設取得補償課では駐屯地や基地の土地を購入する仕事をしています。

こういった中で、私、先程も申し上げましたとおり、施設管理課というところで仕事をしております。こちらは防衛省が所有する不動産の管理の仕事をしております。こういったことをするのかということなんですけど、簡単に申し上げますと、大家さんとか地主さんの仕事に似ているかと思えます。

実はですね、駐屯地や基地がある土地や建物というのはですね、実際に使用する自衛官の方々に対して近畿中部防衛局が簡単に申し上げますと「貸している」というような状態でございます。それらが法律により決められております。

私の仕事はですね、その「貸している」状態にある土地や建物をですね、きちんと本来の目的通りに使用しているのかということのを調査したりだとか、あと駐屯地や基地の隣にお住まいの方々と、どこからどこまでが所有する土地になるのか確認したりだとか、他にも駐屯地の土地、建物をですね、例えば売店を出店する方々に使用していただく、そういった時の手続きなどを行うのが私の仕事になります。

普段はですね、デスクワークが多いんですけれども、そういった場合、ずっと昔の先輩方から受け継がれた資料を開きながら、土地や建物の経歴を調査しましたりですとか、文書を作成するのが主な業務内容になります。

そうなんですけれども、自衛隊の駐屯地や基地といえ、全てが街中にあるわけではございませんので、特に演習場という訓練をするところなんですけれども、演習場などは山の中でございます。

となればですね、街中と違いまして区画が整理されているわけではございませんので、なかなか土地と土地の間の境界というのが分かりません。そういった場合、かなり古い書類を調査したりだとか、登記簿を法務局さんに見に行ったりだとかするんですけれども、最終的には実際に現場に出向いて、現場を確認をするということになります。ただ、これが結構大変なお仕事でして、先程も申し上げましたとおり、演習場、山の中でございます。境界付近と申しますと、演習場の一番端っこになりますのでアスファルトで舗装されておりません。ですので、整備されていない状況になりますので、ありのままの自然が広がっております。

そういったところに出向くわけなんですけれども、深い沼に足を取られて長靴の中まで泥まみれになったりだとか、他にも背丈より高い藪は私は経験無かったんですけれども、初めて経験しました。背丈より高い藪に前進を阻まれながら、ほぼ崖とっていいような坂を這いつくばりながら登ったりだとか、そういったこともございました。

他にも私も初めて見たんですけれども、動物もいます。演習場となりますと、かなり深い山地でございますので、動物はいるんですけれども、サルの群れだとか、滅多に動物園以外ではお目にかかれないような動物も見ます。他には夏場なんですけど、同僚、上司とともに演習場に参った際には、蛭に襲われるなどしました。多分、見たことのない方が大半だと思うんですけれども、写真を載せるわけにはいかないぐらい気持ち悪い

ので、載せておりません。申し訳ございません。こういったこともございますので、たいていデスクワークと申し上げたんですけれども、ときどき肉体労働もございます。

何ですけれども、駐屯地や演習場の境界というのがどこまでなのかというのを常に把握することというのは、重大な事故に繋がりがねないトラブルを防いだりとか、そういったことに繋がりますので、こうした確認というのは必ず必要になります。一般の住人の方々がですね、いつの間にか演習場の中に入っていた、訓練のまっただ中にいたといったようなことはあってはなりませんので、境界を確認してですね、そういった結果をきちんと書類に残して、ずっと先まで、半永久的に保管するようにすることも私達の仕事になります。

このようにですね、現場確認など大変なことも沢山あるんですけれども、私自身はこの仕事にとってもやり甲斐を感じています。それはですね、何十年も前に私と同じ業務に携わった先輩達の残してくれた資料を読むことも楽しいですし、それらを引継いで私自身も、ずっと先の後輩にも私の作った資料を引き継ぐというのも緊張感もございまして、また嬉しくも思います。

わたしからは以上になります。ご静聴いただき、ありがとうございました。

パネルディスカッション

島田局長： 皆さん、長時間に亘ってありがとうございました。私が最初に、本当なら1時間程かけて話す話しを駆け足だったんで、ちょっと抽象的過ぎて申し訳なかったです。その分を4人の皆さんが日常生活を赤裸々に語っていただいて、ご自分の、さっきはね、ちょっと上品に喋っていたけれど、一皮むけばもうちょっと人間臭さが出てくると思いますので、そこを質問してまいりたいと思います。

一番最初ね、これ全員に聞きます。順番に倉角さんから答えて下さい。今までで一番キツかった仕事は何ですか？

倉角1陸曹： 熊本地震の時に災害派遣で、ちょっと息子の試合の支援の応援に行っただけなんですけども、ちょっと油断をしてたんで、急遽呼ばれて、ちょっとバタバタしてというのが一番私の中では精神的に、肉体的には全然大丈夫だったんですけども、ちょっとキツかったなというのがあります。

島田局長： でも子供さん、分かってくれたんでしょう？

倉角1陸曹： はい、子供は。やはり何度かそのようなことが今まであって、突然出て行ってしまうということがあったので、2人とも一度は泣きましたので、それでもう理解して、大丈夫です。

島田局長： よくできたお子さんが、助けてくれたということですね。お隣の深澤さんどうですか、一番辛かった仕事？

深澤1海曹： 一番辛かったのはですね、初めて実習で船に乗った19歳の時だったんですけど、3週間かけて横須賀から各地へ行く船酔いで大分やられました。

島田局長： 山梨県人だから。

深澤1海曹： もう海へ飛び込んでやろうかと思ったんですけど……。

島田局長： お隣、福田さんはどうでしょう？

福田2空曹： 私はですね、自衛隊に入ったその1日目ですね。やっぱり、すごくホームシックになりまして、辞めようかなと一瞬思った時期もありました。

島田局長： でも、それ初日でしょ。その後、立ち直った？

福田2空曹： そうです。

島田局長： その後、立ち直った？

福田2空曹： 大丈夫です。直ぐに皆と仲良くなって、楽しくできました。

島田局長： それで、今日があるということね。はい、前田さん、一番辛かったことは何ですか？。

前田事務官： 私はですね、先程も申し上げてたんですけど、演習場の中の境界の確認ですね。福知山市にあるんですけど、現場の坂道の斜度がものすごくってですね、ヤブ蚊もすごく前進を阻んでくるんですけど、26歳にもなって顔に切り傷を作りまして、何とか行ったという覚えはあります。

島田局長： でも、さっき上司に聞いたら、あなたはその時に蛭の攻撃に耐えたということですけど、上司が全滅したとかという話で……。

前田事務官： そうですね、蛭はまた別の所だったんですけど、上司とその他いらしていた方々が、私以外全員の方が蛭にやられてしまいました。

島田局長： 深澤さん、さっきの話の中で、自衛隊というのは素晴らしい教育システムだということをおっしゃってた。やっぱり一番それを実感したのはどんな時ですか？

深澤1海曹： そうですね。一番実感したのは高専を出た方と航海でエンジンの話をする機会があったんですけども

島田局長： 高専というのは、高等専門学校？

深澤1海曹： 高等専門学校のことですね。話をしたんですが、私は普通科の高校で、エンジン部門の教育を全然受けたことがなかったんですね、自衛隊に入るまで。自衛隊へ入って得た知識で高等専門学校で機械をやった方と対等にずっと喋れたというのが、いろいろと教えて貰っていたんだなど、知らぬ間に身についた知識というのは凄いなど、その時思いました。

島田局長： それは隊内の日常の教育の中で、知らず知らずのうちに……。

深澤1海曹： はい、そうですね。たたき込まれましたけれど、覚えることができました。機械系のことを学んで、機械系の学校へ行って、仕事に就かれる方いるんですけど、全く普通の人間が一人前に、プロフェッショナルに育て上げてくれたと思います。

島田局長： 自衛隊というのは皆さんご存じだろうけども、事務官も合わせると25万人以上いますよ。実人員では24万人近くということで。その多くの人達が今みたいな専門分野の技術教育を身につけて、それでシステムを動かしている、これが特徴なんですね。ですから昔から自衛隊では1人の英雄はいらないんですよ。集団戦、チーム、まさにそれを担うのが技術の習得ということだと思いますね。

福田さんは陸から空と、極めて珍しい経緯を辿ったと思うけど、そういう中で自衛隊が自分を育ててくれたと一番実感したのはいつですか？

福田2空曹： 一番育てていただいたと実感した時は、やっぱり航空自衛隊に入って3曹という階級になった時かなと思います。階級は皆さんちょっと分かりにくいかと思いますが、士長から3曹というのは昇任試験がございまして、本当に周りの先輩方からのご支援があってですね、勉強を教えてもらったりですね、そういったところで昇任させていただきましたので、そういったところかなと思います。

島田局長： 昇任試験の制度も非常に厳格でね、勉強した人はちゃんと昇進していくという、そういうステップアップ、いわゆるキャリアパスが明確な集団であるという、これも一つです。

あんまりどんぶり勘定というのはなくて、しかし統合幕僚長あたりになるとどんぶり勘定で決めていると官邸周辺ではよく言われてましてね、これはちょっと、あまり大きな声では言えませんがね。少なくとも組織を支える中堅幹部、この人達は非常にストイックな学習の成果というものが、その後の自分の仕事を決めていくというような、そういう分かり易さがありますよね。その分かり易さの一方で、倉角さんに是非聞いておきたいんですけども、ご主人、旦那さんも自衛官でいらっしゃるんですね、ご夫婦でね。

倉角1陸曹： はい。

島田局長： 先程のお子さんのこともあったけれど、2人の子供さんの子育てにあたって、夫の自衛官は、ご亭主はどういう風に支えてくれたんですか？

倉角1陸曹： まあ家事全般は、全体的にやってくれるんですけども、主人と共に一緒になってたまたま引っ越してきた家のお隣さんが大変良い人で、主人のサポートも全部ひっくるめてやってくれる方だったので、続けてこられたのかなと。なので主人の時間はそんなに無かったのかも分からないんですけども、昨年も2ヶ月程教育で不在にしたんですけども、その辺は母親代わりもちゃんと担ってくれてやりました。

島田局長： 訓練だけではなくて、先程も出てた分厚い教育課程というもので家族と離れて何ヶ月間も過ごす、これも頻繁にあるんですね？

倉角1陸曹： 私はその教育には3曹になる時以来だったので、20年振りくらいに不在させてもらったんですけど。

島田局長： 家族の支えがあってこそできたということでしょうね。

倉角1陸曹： そうですね。

島田局長： 前田さんに聞きます。さっきお話の際に、何十年も前に作った先輩の資料を読むのが楽しくって、また自分がそれを今の形に整えて、何十年のちの、タイムカプセルのような話だったんですけども、やっぱりそこで自衛隊の歴史というものを実感するという、そんな体験もありました？

前田事務官： そうですね。私が管理している演習場だとか駐屯地の土地というのは、戦前からずっと受け継がれている土地でもありますので、その方々が作った資料だとかを、本当に茶色くなってボロボロなんですけど、読み解く機会が多くあります。そういった時、やっぱりタイムカプセルを開けたような嬉しさだとかを感じますね。

島田局長： 戦前からね、要するに旧陸軍省の時代から旧日本陸海軍が国有地としていろんな施設を持っていた。それが戦争に負けてアメリカ軍に接收された所が多かったんですね。その接收されたものが、戦後、徐々に徐々に帰ってきて、その中の一番良さそうな所を自衛隊が使っていると、あんまり良さそうでない所に福島第一原発が実はできたりしたんですよ。あそこ陸軍の飛行場だったんですよ。そんなような日本の歴史を辿る、土地の歴史一つを取ってみても自衛隊というものが関わる分野というものが、常に、先程私が冒頭で申し上げた政治と歴史と、世界史と、自衛隊ということに繋がっていくと思うんです。

今度は誰に聞きましょうかね。深澤さん。一番最初の航海で船酔いに苦しんだということですけども、そういう中で遠洋練習航海ですね、国際交流ということが非常に印象に残ったと先程おっしゃったんですけども、どうなんですか、いわゆるネイビーファミリーという、ネイビーは皆友達だという商船の世界、軍艦だけではなくてね、船乗りっていうのはそういう気質がありますけれど、今海上自衛隊の中ではそういう風な気風っていうのは古風になっているのか、機械化が進みすぎて薄れているのか、どっちでしょうか？

深澤1海曹： ご存じの方もおられると思うんですけど、続々と今、船の方も自動化と

いうものが進んでおりまして、人は減っているんですけど、結局最後、動かすのは人なんです、船乗りの魂というものはですね、代々受け継がれていると思います。特に機械化が進みながら、ネイビーの気質が薄れてきたというのは、私は感じたことはないです。

島田局長： 時代の変化でそういう風な、変わるものと、しかし変わらないものと両面あるのですよね。隣の福田さんに今度聞きましょう。私さっき話を聞いていてですね、最後におっしゃった陸海空の統合輸送、これは私も「えっ！」というね、統合運用という、いざという敵対勢力、侵略勢力があった場合には、陸海空が協力して作戦に当たるといえるのは世界の趨勢で、自衛隊もそのための訓練をしていますけど、輸送の世界でもやはり陸海空の統合輸送ということが一般化しているのですか？

福田2空曹： そうですね。私自身はその統合輸送というものに携わった、完全に携わったわけではないんですけど、例えば先日の熊本の地震の時とかですね、統合任務部隊というのが編成されてですね、陸海空、統合で運用しております。そういったところで輸送部門でも統合してですね、協力して、皆で協力するという形で任務しております。

島田局長： 陸海空、それぞれ重複するところがあるかも知れませんが、陸は車で、空は航空機とヘリ、海上自衛隊は船舶ですね。そういうもので調整をしながら、一ヶ所に物資を大量に運ぶと、そういう計画づくりということなんでしょうか？

福田2空曹： そうですね。勿論調整してする部隊もあれば、実際に実業務をする部隊もあります。私は将来的には調整する部門とか、そういったところで携わっていったらなと思います。

島田局長： やっぱどこの国でもね、日本は自衛隊という憲法の下での日本独自の實力組織というものを持っているわけですが、似たようなネイビー、アーミーと呼ばれる世界の組織はロジスティックスの世界、物の輸送、備蓄、そして補給とこれが大きくものをいってくるわけですね。前田さんどうですか？ 実はよく映画で見られるようなファイティングスピリット的な自衛隊ではなくて、実は自分らの仕事もそうだと思うけど、組織を支えていくと、そして組織が動くように皆でサポートする、この辺の仕事のやり甲斐というのはどう感じていますか？

前田事務官： そうですね、私が所属しております近畿中部防衛局自体ですね、自衛官の方々が常に100%の力を出せるようにということで働いている、サポートする機関なんです。そういった業務に携わるとですね、自衛官の方々

の苦勞だとか、頑張る姿だとか拝見する機会も多くてですね、またそういった自衛官の方々と接する時に優しく接していただけたりとかもしますので、とてもサポートしていて良かったなど。こういった方達の優しさだとか心遣いがですね、いざという時に国民の皆様ちゃんと行き渡るように、私達がサポートできたらなという風に思います。

島田局長： 多分ね、会場の方から寄せられた質問でね、自衛官と事務官というのは日常業務で果たしてどの程度の接点があるのですかと、実は結構すれ違っているのではないのですかという質問なんですけど、どうですか？

前田事務官： すれ違うことはあまりないと思うのですが、ただ業務上ですね、携わる自衛官の方々と同じ仕事に携わるといようなことが部署によって違うので、頻度が違うと思います。例えば、私なんかは現場に行くことがよくございますので、演習場のことをよくご存じの方だとか、自衛官の方には多いですので、そういった方々にお世話になってご案内いただくことがございます。

島田局長： 藪の中に入る時ね、面倒見てもらうんですね。はい分かりました。

島田局長： これは倉角さんに聞きましょう。有給休暇ね、今日、会場に若い方達、これから就職活動をやろうとする人からの質問だろうと思いますが、だいたい有給休暇を年に何日取得できていますか？

倉角1陸曹： 有給休暇ですか。今の職場に来てからは、まだ正確な数が把握できていないんですけど、部隊にいる時には年間10日前後は取れるのではないかと思います。また後、子育てしていて、子供が急に熱を出したりとか、そういう時には直ぐに取れるような制度というか仕組みになっております。

島田局長： 深澤さんは有給休暇を何日ぐらい取っておりますか？

深澤1海曹： 有給休暇は、私は10日ぐらいは取ってると思うんですが、有給休暇以外にですね、年末年始とお盆とゴールデンウィークに、多分、一般的よりは長めの休暇を特別休暇として取らせていただいております。1週間から全部合わせると2週間ぐらいですね。我々24時間365日の業務なので、全員が一斉に休むと業務が止まってしまうので、交代々々で休むようにしています。結果として2週間ほどある中を皆で交代で休んでいくという形を取っています。

島田局長： ということは、航海に出たら休みがなくなるけれど、航海から帰ってきたらその分休めるというそういう仕組みですか？

深澤1海曹：　そういうことです。年間120日出航して、120日岸壁に停まって船の整備をして、120日休みなさいというのが基本方針となっております。

島田局長：　福田さん、貴方は有給休暇、何日取っていますか？

福田2空曹：　はい、自衛隊でもですね、数年前からですね、ワークライフバランスの推進というところでやっております、その推進の通達があった時にですね、大体どれくらい取っているのか部隊で調べてみたらですね、私のいた補給処の部隊はですね、17日前後、平均で取っております。

島田局長：　それは労務管理がしっかりしてますね。貴方も後輩の労務管理をしないといけない立場なんではないでしょうか？

福田2空曹：　まだそこまではないですけど。

島田局長：　これからルールが厳しくなりますからね。きっと次の昇任試験からはきっと労務管理が科目に入ると思いますから、気をつけて下さい。

福田2空曹：　わかりました。頑張ります。

島田局長：　前田さん。前田さんの有給休暇、いっぱい取れていますか？

前田事務官：　沢山取りました。有給休暇の取得についてですね、私が所属している課では、課内皆で順番に取っていきこうという空気がございまして、有給休暇を取る際に嫌な顔などは一切ありませんし、どんどん取っていきこうという形で積極的な空気があると思います。

島田局長：　かなり進んでいますよね、言葉どおりだとすればね。出てもタイムレコーダに記録しない人がいたりしてね、これまた労基署に怒られるんですけど。そういうことがないと信じていますので。

　もう一つ、会場の皆さんから寄せられた質問でね、この4人の中で海外派遣とか、海外出張勤務、さっき遠洋航海があったから、深澤さんはあるんですよ。

深澤2海曹：　はい。

島田局長：　海外に派遣されていった際には、家族との連絡をとる手段はありますか？

深澤 2 海曹： はい、ございます。海外に派遣される、今は海自の部隊の船がほとんどなんですけど、家族の方とメールでやり取りできるようになっております。ただ、任務の都合上ですね、電波通信できないところでは駄目なんですけど、訓練の海外派遣とか、特に長期に亘る場合には、何百名の乗員が一斉に通信すると回線パンクしてしまうので、一人 1 日 1 通との決まりがあるんですけども、洋上で家族と連絡を取り合うことはできます。また寄港地ですね、海外の港で入ったところなんですけど、今はですね、何処の国でも日本もそうなんですけど、Wi-Fi が飛んでまして、普通にLINE とかでですね、使えますので、昔、15 年程前はですね、2 時間公衆電話に並んで 3 分話すということもやってきたんですけど、ここ 10 年程急速に発達してますので、特に海外へ行くからというのはあまり感じないですね。国内で単身赴任しているのとあまり変わらないと思います。

島田 局長： この辺がやっぱり、この 10 年、圧倒的に変わっていますよ。

倉角さん、お聞きしたいのは、こういうご質問がありましてね、女性自衛官のキャリアプランを教えてください。私も防衛省・自衛隊の付き合いが長いから、女性がどんどん隊長、司令官、護衛艦の艦長、そういう立場に立つようになって、独身女性が昇進していかざるを得ないと。子育てをしている人達はなかなか家庭の方を主にして、昇進とか仕事の方を少し我慢すると、そんなこともあちこちで見聞きしますけども。どうなんだろう、一般的に見て貴女の世代の女性自衛官は、自らのキャリアというものと家庭というもの、バランスをどう取っていますか？

倉角 1 陸曹： 通信科は女性隊員が多くて、独身で頑張られている方もいるんですけども、大半は結婚して子供を育てて、男性と同じようにキャリアを積んでいってる方が多いと思います。

島田 局長： 最近の 10 年位を見ていて、結婚してキャリアを積むということは、旦那さんが理解があるという人が、男が増えたということでしょうか？

倉角 1 陸曹： そうですね、やはり男女雇用均等法というのが、まあ自然とというか、自衛隊特に男女差別があまりないところなので、自然と湧いてくるのではないかなと思います。

島田 局長： 今キーワードだけど、自衛隊って男女差別がないということは、建前もきっちり守る組織ということですか？

倉角 1 陸曹： 女性ならではのという時はやはり優しいことを言うか、差別ではないんですけどその点の考慮は勿論してくれるんですけども、基本的なものは同等でさせていただいています。

島田局長： なかなか興味深い話しだと思いました。いの一番に何人もの方から寄せられたご質問、これを最後にお聞きしたいと思います。

自衛官・事務官にとって必要な資質は何ですか？これについてお答えいただきたい。福田さんからお願いしたい。どうでしょう。ちょっと長めでも良いですよ。

福田2空曹： 自衛官に必要な資質はですね、まあよく言えば使命感であるとは思いますが。ただ、その使命感というのはですね、私が思いますところでいきますと、最初から使命感がむちゃくちゃ高くて入ってくる方はそういないと思うんです。ただですね、訓練とか任務とか仕事の中で、使命感というのは徐々に向上していくのかなとは思っています。

島田局長： 深澤さんはどうですか。必要な資質？

深澤1海曹： 私も先程話させていただいたように、国防意識は高くなく入った口なんで、必要な資質は優しさだと思いますね。人に優しくできる人は、国民の皆さんにも優しくできるんじゃないかなと思いますので。人のためにできる、高いか多いとかではなくて、人に優しくできる人が資質じゃないかと思います。

島田局長： 今日ね、話を聞いていると、優しい上司とか先輩に恵まれて、嫌な思いをすることなく、だからこそ、ここまで続けてこられたという雰囲気皆さんからありありと伝わってくるんですけど、その辺どうでしょう？

深澤1海曹： そうですね、嫌なというか、鬼のような上司は正直おりました。特に機関科なんで、職人さんの世界なんで、口をきくまで2年くらいかかるような方も実際にいたんですけど、私がへまするバックで火消しに一生懸命走り回ってくれたというかですね、この前定年された方に初めて教えて貰って、送る側の方が泣きそうになってしまったこともありまして、特に上司とか、同僚とかですね、非常に良い方に巡り合わせが良かったなと思っています。もう20年ほど経ちますが。

島田局長： 優しさなんですね。はい、前田さんに先に聞きましょう。どうですか、事務官にとって、防衛省・自衛を背中に背負っている特別な役所ですよ、霞ヶ関の他の官庁の事務官とはちょっと違う、そういう仕事を続けていく上で必要な資質とは自分ではどう考えますか？

前田事務官： そうですね、事務官の場合なんですけど、私自身で何か特別な資質があったといわけではなかったと思うんです。でもですね、例えばコツコツ努

力をするということが得意だとか、きちんと自分の中で考えて行動することができるだとか、そういった自分の長所を考え出して生かせるような場だなという風に思います。

島田局長： 多様な可能性というのかね、組織が幅が広くて、やることが沢山あるんで、探そうと思えばいくらでもあると、そういう社会ですね。

前田事務官： そうですね、やはり適材適所というところがあるかと思いますので、それぞれが持つ長所をどんどん生かしていける場かなという風に思います。

島田局長： じゃあ、最後に倉角さんに同じ質問。自衛官にとって必要な資質とは何でしょう？

倉角1陸曹： 私は、一生懸命にやる気持ちだと思います。一生懸命やっていたら絶対周りを見てくれるし、絶対に見捨てる組織ではないので、その気持ちがあればいいのかなと思います。

島田局長： ありがとうございます。私もこういう形で4人の皆さんのリアルな声を聞きまして、大変勉強になりました。ちょうど時間が20時となりました。私は時間を守るので有名な司会者でありましたので、以上で終わらせていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。